『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

紫式部の宗教観

――「出家」の視点から――

三村晃功

一．はじめに

新入生のみなさん、こんにちは。四月五日の入学式でお会いしてから、ほぼ二十日ほど経過しましたが、そろそろ大学生活にも慣れましたか。今日は「学長講話」ということで、みなさんにお話しする機会を得たことをたいへん嬉しく思っています。そこでこの機会に、本学にとってもっとも重要な課題である、京都光華女子大学が何ゆえに高等教育機関として存在し、今日までどのような教育展開を進めて、どのような

学生を育成してきたのか、要するに、本学の存在理由・目的および存立の意義・役割などについて、みなさんにお話し申しあげ、これらの問題をみなさんとともに真剣に考えてみたいと思います。そうして、今日の本題である「紫式部の宗教観」へと話を進展させていきたいと思っています。

さて、日本全国には大学と称する高等教育機関は七百校以上、短期大学（部）を含めますと、千二百校以上にのぼります。そのほとんどが国公立大学に代表される一般大学ですが、そのような大学の存在状況の中で、本学は他の一般大学とは異なる建学の精神を掲げ、教育実践を展開しているユニークな大学です。まずはこの点に、みなさんは注目していただきたいと思います。

その「建学の精神」とは、校訓「真実心」に象徴される「仏教精神に基づく女子教育」を意味しています。そうして、本学はこの建学の精神に基づき、人間の崇高な精神活動によって創造された価値（文化）の追求を根底に置いて、自己の未来を志向しながら、同時に他者への思いやりをもって能動的に行動できる、二十一世紀を生きるにふさわしい女性の育成を、教育目標に掲げて、教育実践に励んでいるわけです。

ところで、建学の精神のうちの「仏教精神」が東本願寺の創始者である親鸞聖人の浄土真宗の教えに立脚した精神であることは言うまでもありませんが、大学名となっている「京都光華女子大学」の「光華」の意味を、みなさんはご存知ですか。

まず、「光華」なる名称は『仏説観無量寿経』という経典に依拠した命名ですが、そこには、阿弥陀仏の浄土を褒め讃えて、「その光、華の如し」と書かれています。ちなみに、仏教で「光」は、人間の智恵などを超越した最終目的である、究極の智恵を意味し、「華」は、自分自身の清浄性、清らかさに目覚めることを意味します。ですから、「光華」とは、究極の智恵を受けて、自分自身の清浄性に目覚めるという、まことに深遠な意味を担った名称であるわけです。

なお、本学の校訓「真実心」は、お釈迦さまが「真実といふは、即ち、是如来なり。如来は即ち、是真実なり。」とおっしゃった言葉に依拠しており、その意味するところは、われわれ人間をこの世に送り出してくださった「如来の心」ということです。校訓「真実心」もまた、仏教精神に根差した、幽深な趣をたたえたスローガンになっているわけです。

本学の建学の精神のもうひとつの柱である「女子教育」については、『仏説観無量寿経』が悩み多き一女性のために説かれた経典ですから、「女子教育」もまた、仏教精神に基づく命題になっている、と理解することができます。ちなみに、人間というのは男性と女性を合わせた総称ですから、人間全体を半分に分割すると、男性と女性になるわけです。したがって、本学の教育命題は、女性の側から男性への関心、理解を十二分に洞察した後に、完全な人間全体の理解に到達することを志向するところに存するといえますが、換言すれば、本学は女性という視点に立って、高い宗教性をもった心豊かな人間を育成することを、教育命題にしているのだ、とも定義できるでしょうか。

昭和十五年九月、東本願寺門首夫人であった大谷智子御裏方は、以上のような考えに立った設立趣旨の実現として、光華高等女学校を創設なさったのです。そうして本年、設立母体である光華女子学園は六十六歳を迎えたわけですが、奇しくも、私の誕生日も同じ昭和十五年九月ですので、わたしの人生は光華女子学園とともにあるともいえるわけで、その点、京都光華女子大学とわたしの間には、何か深い宿縁でもある

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

のでしょうか。

それはともあれ、わたしは学長に就任して以来、今年で四年目を迎えました。最初の年の講演題目は「我が人生に悔いなし」でしたが、それはわたしが今日まで歩んできた人生について、逆説的な意味合いをこめて語ったものです。これは『真実心　第二十五集』に掲載されましたが、この本を読んだ各地の大学院生の間で結構評判になって、私自身はなはだ驚いた次第です。二年目と三年目は、仏教の世界に身を置いて和歌活動に専心していた、僧侶歌人の生きざまに言及して、「兼好法師の宗教観」と「西行法師の宗教観」の各演題で講演しました。そうして本年ですが、今年の「学長講話」のテーマについて家族の間で話題にしたところ、妻が「日本の古典のなかでは『源氏物語』が最大の傑作だから、それを執筆した作者の宗教観だったら、わたしも聞きに行ってもいいわ」と感想を漏らしてくれましたので、本年は「紫式部の宗教観」という演題で講演することに決めた次第です。

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

二、『源氏物語』の主題

さて、新入生のみなさん、みなさんのなかには『源氏物語』を全巻読破した人がどのくらいおられますか。『源氏物語』の分量は原文で、四百字詰め原稿用紙二千枚以上ありますが、現代語訳だとそれ以上の枚数に達するはずです。とはいえ、このなかには日本語日本文学科の学生諸姉もいるわけだから、現代語訳で全巻読破した人は、何人かはいるはずでしょうが、ここでまず『源氏物語』の主題（テーマ）について、わたしの見解を紹介しておきたいと思います。

わたしは『源氏物語』は、現世における人間の愛の究極の姿を描出した作品で、その到達点を宗教的愛に見出しているところには、従来の物語文学が達成することのできなかった独創性が認められ、その点、ユニークな文学作品となっている、と思っています。また、わたしは『源氏物語』の成立時期を、寛弘五年（一〇〇八）ごろと想定していますが、それは現在を千年ほど遡る、平安時代中期の一条天皇の御代という

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行〔京都光華女子大学〕

時代に当たります。そのような昔に、一言でいえば「人間愛から宗教愛にいたる過程を種々様々に追求したもの」という主題（テーマ）を、あらゆる角度から描出して、千年後の現在にいたるまで、数多の読者を獲得しつづけている文学作品が誕生しているなんて、想像するだけでも、本当に驚きを禁じえませんね。

『源氏物語』は以上のような主題（テーマ）に沿って、この世における人間の愛の種々相を見事に描き切った、平安時代に誕生した「作り物語」ですが、作者はこの愛の種々相を描出するために、五百人を超える登場人物を設定していますので、それら五百人の登場人物を対象にして考察を進めるのが本来のありかたでしょうが、諸般の事情でそれもかないませんので、本日は現世を捨てる行為である「出家」という用語（ターム）の視点から、紫上、宇治の大君、浮舟の三人の女性登場人物に絞って、作者・紫式部の宗教観を明らかにしてみたいと思います。

三、『源氏物語』における仏教的要素

さて、『源氏物語』が現世における人間愛の究極の姿を描出した文学作品である、とさきに言及しましたが、それでは『源氏物語』には宗教（仏教）に係る事象は取り扱われていないのでしょうか。答えは否で、一条天皇の御代に実人生を生きた紫式部が、思想的環境として仏教、儒教、民間習俗的なものとして神道に影響を受けたであろうことは容易に認められます。

まず、仏教からの影響は「阿弥陀仏」（若紫）「読経しつる法師」（同）「念仏の僧」（葵）「律師」（夕霧）「僧都」（若紫）「不断の御念仏」（御法）などの仏教関係の言葉が散見するうえ、「前の世の契り」（明石）「前の世の報い」（須磨）「後の世の御罪」（夕霧）「後の世の行ひ」（柏木）などの語句が散見するのは、源信の『往生要集』の「夫往生極楽之教行、濁世末代之目足也」に依るもので、そこには浄土思想の反映が認められるでしょう。

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

また、儒教からの影響は「女は三つに従ふもの」（藤袴）の語句、さらに神道からの影響は、たとえば須磨流謫中の光源氏が暴風雨にあったとき、「色々のみてぐら捧げさせ給ひて『住吉の神、近き境を鎮め護り給ふ。…』と、多く大願を立て」（明石）ると、夜になってその風雨も治まったという叙述にみえる「住吉の神」をはじめとする「はもりの神」（柏木）「葛城の神」（夕顔）などの「神」に関する語句の散見することで明らかでしょう。

このように作者が仏教、儒教、神道に影響を受けていることは、藤原貴族社会に生きた人物として当然であろうし、したがって、『源氏物語』のなかに「出家」なる現象がしばしばみられることもまた、当然のことといえるわけです。それでは、「出家」という概念ないし実行が当時の人びとにいかなる約束をするものなのか、すなわち、『源氏物語』において数多の登場人物に出家を促したものはいかなるものであったのでしょうか。次に、この問題を検討してみたいと思います。

四．『源氏物語』における「出家」の理由

さて、『源氏物語』に登場する人物が「出家」に抱いた観念、および「出家」にいたった理由について検討してみると、おおよそ次に掲げる六つの理由が想定されるようです。

まず第一に、当時の一般常識としての老齢ないし病気回復のためと、長寿を保つために出家するという理由があげられます。健康のすぐれぬ朱雀院は「静やかなる所に、やがて籠るべくおぼしまうけらるる本意」（若菜上）で出家され、また、六条御息所は「俄かにおもく煩ひ給ひて」（澪標）、大弐の乳母は「いたくわづらひて尼になりける」（夕顔）が、これらは前者の事例です。一方、弁の君の「いたくねびにたれど、昔清げなりける名残をそぎ捨てたれば、額の程さまかはれるに、すこし若くなり」（早蕨）たる様子をみて、薫が「それに延ぶるようもやあらまし」（同）と言うのは、出家が長寿を保つ手段足りうることを意味しており、これは後者の事例です。

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

その第二は「後見」を亡くして出家する場合です。空蟬は老齢の夫に先立たれ、「憂き宿世ある身にて、かく生きとまりて、はてはては珍しき事どもを聞き添ふるかな、と人知れず思ひ知りて」「尼にな」（関屋）りますし、また、「年頃睦まじく（紫上に）仕うまつり馴れたる人々、暫しも残れる命うらめしき事を歎きつつ、尼になり」（御法）の記述も、「後見」を亡くしたことが最大の原因でしょう。また、源氏の側近に伺候していた女房たちが、源氏の死後は「皆所々にあかれ散りつつ、おのおのの思ひ離るるすまひをし」、「物覚えぬ心にまかせつつ、山林にゆきまじ」（宿木）るのも「後見」を失って尼になった事例です。

第三の理由として、政治的敗北ないし権力者への恐怖により出家する場合があります。まず柏木は女三の宮との間に衝動的に起こした過失に対する罪の意識から、「世にながらへむ事を憚り多う覚」（柏木）えますが、しかし「身を思ひ落としてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、のちの世の行ひに本意深く進」（同）んだのですから、柏木の場合は結局、源氏の権力に屈して出家を志向したとなるでしょう。また、桐壺帝の第八皇子・宇治の八宮も、かつて冷泉院との立太子問題をめぐっ

て弘徽殿大后の暗躍の犠牲になって、「いとどしき世に、あさましうあへなくて、移ろひ住み給ふべき所のよろしきもな」（橋姫）く、宇治の山里に籠って俗聖的生活を送ったのですから、この場合も第三の理由に属するでしょう。

第四の理由に考えられるのが、罪の意識から出家する場合です。藤壺は源氏との「物のまぎれ」（賢木）から生じた交渉に対して、「いとどしき世に、憂き名さへ漏りいでなむ」（同）と「いと心憂く宿世の程思し知られて、いみじ」（同）く思って、「うとましう過ぐしがたうおぼさるれば、背きなむ事をおぼし」（同）て出家しますが、藤壺に出家を促した根本の理由は「われにその罪をかろしめて許し給へ」（同）の言葉が示すように、罪に対する良心に存したと思われます。また、女三の宮は、柏木との過失も「めざましく」（同）感じるのみの幼稚な女性ですが、事件の発覚後は、「院（源氏）をいみじくおぢ聞え給へる御心に」（若菜下）、「尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、又亡くなるとも、罪を失ふことにもやとなむ思ひ侍」（柏木）って出家するのですから、この場合も第四の理由に該当します。

第五の理由に、世の不定・無常を感じて出家する場合があります。この場合、浄土

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

思想の影響が多大でしょうが、それを自己の宿世と感じて出家するところに『源氏物語』の特徴があると思います。たとえば、藤壺が源氏との「物のまぎれ」以来、「いと心憂く、宿世の程思し知られて、いみじ」（賢木）く思うのは前述しましたが、藤壺はこれに「世の中の常なさをおぼし」「世の憂さに堪へず」（同）して出家しています。また、朧月夜尚侍も晩年は「常なき世とは身一つのみに知り侍り」（若菜下）て出家していますし、かの好色な老女源典侍も「あさましとのみおぼさるる世に」（槿）無常を感じて、「のどやかに行ひをもうちして過ぐ」（同）す身となっています。これらの事例はいずれも、第五の理由に出家の根本的意図があるように推察されます。

最後に第六の理由として、人間の愛に限界を感じて出家する場合が考えられます。これは後に説明するように、紫の上、宇治の大君、浮舟の三人の登場人物が志向ないし決行した出家の根本理由であって、『源氏物語』における出家を促す理由としては、この第六の理由がもっとも重要な意味を担っていると考えられます。

以上、『源氏物語』における「出家」の理由について整理しましたが、ここで注意を要するのは、登場人物が以上掲げた理由の一つによって出家するのではなくて、各

種の要因が複雑に絡み合って出家を促している点で、就中、第五の理由に掲げた、この時代の人びとに通底していた社会習俗的な「無常」の観念が他の諸要因と絡み合っている実態です。換言すれば、登場人物のほとんどは、この無常観を背景に図り難き世の中の、図り難き事象に直面して、自己の幸福・不幸を実感し、それを自己の「宿世」と諦観して受容していたのです。それは『源氏物語』の登場人物のほとんどが、諦観という一種の消極的運命観から出家しているように推察されるからです。

五．『源氏物語』における人物造型

それでは、第六の出家理由にもっとも深く係っていると考えられる、紫上、宇治の大君、浮舟はどのような考えで「出家」に対応していたのでしょうか。ここでこの三人の人物造型のされかたを「出家」の視点から追求してみようと思います。

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

（1）紫上の造型

まず、紫上の場合ですが、紫上の晩年にいたる人生は源氏の愛情を一身に受けて、順風満帆の人生でありましたが、彼女の晩年の心境は源氏と幸福な生活を送っていただけに、重要な意味をもっていると考えられます。なぜなら、紫上は晩年にいたって自己の内面的欲求として「出家」を決意しているからです。それは源氏の関心を紫上から乖離させた女三の宮、朧月夜尚侍なる対象がもはや、出家してしまい、紫上は以前と同様の地位、愛情を回復できる状況に置かれたにもかかわらず、「まめやかには、いと行先すくなき心地するを、今年も斯く知らずがほにて過ぐすは、いとうしろめたくこそ、さきざきも聞ゆることいかでか御許しあらば」（若菜下）と源氏に出家の許しを乞う、また、「物はかなき身には過ぎにたるよその覚えあらめど、心に堪へぬ物歎かしさのみ打添ふや、さはみづからの祈りなりける」（同）と述懐する紫上の心境が物語っているのではないでしょうか。

しかし、紫上は自己の内面的欲求として道心が兆しはじめたにもかかわらず、結局、

源氏の必死の制止によって念願の出家を果たせずに死去するのですから、彼女は地上の人間愛に生きる女性として形象化された人物ということができるでしょう。ただし、紫上が女性の真実の生き方として、宗教的世界に積極的に入ろうとする意志を自覚しているところには、絶大な意義があるといえるように思います。

（2）宇治の大君の造型

紫上の晩年の境地をさらに進展させたのが宇治の大君と考えられます。宇治の八宮を父親にもつ大君は、宗教的雰囲気に包まれて生活する父親の影響によるためか、いつも道心堅固で、求愛する薫大将に対しても、宮廷の男性は信頼しがたいという自己流の理由で結婚を拒否します。一般化していえば、大君は薫との愛に生きることを望むにもかかわらず、彼女は現実の愛に不信を抱き、常に宗教的雰囲気のなかに安住して、その埒外には出ようとしないわけです。この大君の態度は、宇治という世界をよく象徴していますが、そこには作者・紫式部の心境の反映が著しいように察せられます。すなわち、大君は人間の愛の理想を実現させた紫上とも、現世の執着を断ち切っ

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

て出家遁世した浮舟（後述する）とも異なる人物として描出され、彼女はこれまでの物語世界には見られなかった、結婚によらざる愛の永遠化の姿を確立させたのです。そこには愛の頼みがたさを認識して、出家を自覚した紫上の苦悩を踏まえて、さらに自己の意志で宗教的世界に理想郷を見出そうとする人物造型を確立させようとする、作者の企図が充分に反映していますが、実は、この大君の造型こそ、『源氏物語』における特異な精神構造をもつ人物の役割を担っている、とわたしは注目しているのです。

（3）浮舟の造型

この大君と紫上の心境を融合して新たな境地を開いたのが、浮舟なる人物です。大君の形代として登場してきた浮舟は、いくらか観念性の強い人物形象のなされた大君とは趣を異にして、現実的な人物造型がなされています。はじめは道心堅固で誠実な薫大将の愛を信じて、薫との結婚を一途に望むなか、横から割って入ってきた、我を忘れさせるがごとき、好色（ハンサム）で魅惑的な匂宮の接近に、思わず心を奪われ

た結果、両極ともいえる二人の男性の間で愛の相剋・葛藤に悩んだあげく、浮舟は宇治川に入水自殺を図りますが、図らずも横川の僧都に助けられて、その庇護のもとに横川に住むようになって、遂に横川の僧都のもとで、浮舟は自己の固い意志で出家を敢行するのです。その後、浮舟の事情を聞きつけた薫が彼女のもとを訪れて、しつこく愛の修復を試みますが、浮舟は頑として聞き入れず、一途に仏道修行に励む生活へと入ります。

人間愛から宗教的愛への過程を描出しようと試みた作者・紫式部の主題（テーマ）は、紫上、宇治の大君と造型しながら果たせませんでしたが、浮舟の造型によってようやく、ここに実現をみ、達成されたのです。

『源氏物語』において出家・遁世した人物は多くを数えますが、それらの大半は、物語の舞台から姿を消すための手段であるかのように、出家しています。ところが、紫上・宇治の大君・浮舟の場合はそれらの人物とはまったく趣を異にして、出家なる事象が生きるうえでの重要な課題として採用されているのです。それは作者が『源氏

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

物語』において、男性との愛の交渉から生じる女性の各種の苦悩・焦燥・破綻を追及する過程のなかで、「出家」なる意味が大きくクローズ・アップしてきた、創作意図のもたらす結果以外の何ものでもありません。ですから、これらの三女性を追究する作業は、『源氏物語』の作者の精神機構を解明する手掛かりのひとつになる、と推断できるのです。

六．『紫式部日記』における「出家」の様相

『源氏物語』における「出家」の意義はおおよそ以上のとおりですが、それでは、現実の紫式部の実人生において「出家」はどのような意味をもち、どのような位置を占めていたのでしょうか。この問題については幸い、彼女の内面を披瀝した『紫式部日記』なる文献が残っていますので、ある程度の解答は得られると思います。ただ、『紫式部日記』は、彼女が一条天皇の中宮彰子に女房として伺候した、寛弘五年（一〇〇八）秋から同七年までの記事と、その中に古来、消息文といわれていたものが混

入していて、形態的に問題なしとしない文献ですが、いまはそれらの問題は不問に付すことにし、この日記に窺知される「出家」に関する記述を抽出しようと思います。

さて、『紫式部日記』には、彼女の理想とする内面世界と、現実世界との不調和・矛盾現象を記述した場面とが、各所に見出されます。

その式部の心情はまず、冒頭の秋の深まりとともに、土御門邸の「池のわたりの梢」、「遣水のほとりの草むら」が「おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々あはれまさりけり。」という、流麗な自然描写の筆致に窺知されます。

御有様などの、いとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るるにも、かつはあやしき。

（現代語訳＝中宮彰子さまのお姿やお心ばせのご立派なことなど、本当に今更おたたえするまでもないことだけれど、もの憂いこの世の心の慰めには、このような中宮さまをこそ、お求めしてでもお仕え申すべきであったのだと、日ご

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

ろのふさいだ気分とはうって変わって、たとえようもないほどに、おのずといっさいの憂鬱が忘れられてしまうのも、一方ではまた、不思議な気持ちがすることではある。）

この冒頭の記事は、寛弘五年七月十七日、中宮彰子（藤原道長の娘）がお産のために、父親の土御門邸に里下りしている、その別邸を紫式部の目を通して叙述した場面であって、彼女は現実の宮廷生活において美しい中宮の「御有様」や土御門邸の華麗さに心惹かれて「うき世の慰めには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれ」と、「うき世」の辛さを超越して、通常では味わうことのできない、華麗な現実世界に我が身を置くことができる幸せを噛みしめながらも、また一方では、そのような自分自身を「かつはあやしき」と反省しないではいられない、複雑怪奇な心情をもみせているのです。ここには、すばらしいものにおのずから惹かれ、そのままその現象に従おうとする心情と、それらの現象を客観的な立場に立って、ものの本質を洞察しようとする理性とが共存しているのであって、この二重構造的な精神構造は「たゆたひの心」とも命名しうる、作者・紫式部に備わった独特な精神といえるのです。

このような彼女の心情・生活態度は一貫してこの日記に顕現していまして、その心情はまた、一条天皇の行幸を控えた土御門邸の賑々しく、華麗な雰囲気を語る場面においても、

めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の引くかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまさるぞ、いとくるしき。いかで、いまはなほ物忘れしなむ、思ひがひもなし。罪もふかかりなど……

（現代語訳＝結構なことやおもしろいことを、見たり聞いたりするにつけても、ただもう一途に、常々心がけてきた出家・遁世の気持ちの、ひきつけるほうばかりが強くて、憂鬱で、思うにまかせずに、嘆かわしいことの次第に多くなるのが、実に苦しい。でも、いまは何とかしてやはり、何もかも忘れてしまおう、いくら思ってみたところで、甲斐のないことだし、こんなことでは罪も深いことだ、などと……）

というように、彼女の眼は自己の内面的反省へと屈折していくのです。それは現実の

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

華やかな宮仕えの瞬時にも、自己の真実の生き方を突き詰めないではいられない、彼女特有の生活信条・生活態度の具現化と考えられますから、こうした現実の生活に満足の得られない彼女の心の向かう方向は必然的に、その救済を仏教の彼岸に求める境地へと走るわけです。ここに引用した「思ひかけたりし心」とはもちろん、前述の「うつし心」であって、出家の志を意味します。

したがって、彼女の仏道に対する憧憬の念は、

五壇の御修法、時はじめつ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされるほど、おどろおどろしくたふとし。

観音院の僧正、ひんがしの対より、二十人伴僧をひきゐて御加持まゐり給ふ足音、渡殿の橋のとどろとどろと踏みなさるるさへぞ、ことごとのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場殿、浄土寺の僧都は文殿などに、うちつれたる浄衣姿まで、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間をわけてかへり入るほども、はるかに見やらるる心地してあはれなり。

（現代語訳＝五壇の御修法は定刻の勤行をはじめた。われもわれもと、まるで

競って読み上げているかのような大勢の僧たちの読経の声々が、あるいは遠くあるいは近く響き合って聞こえてくる様子は、ほんとうに圧倒されるほどで、尊さに身の引きしまる思いがする。／観音院の僧正が、東の対屋から二十人の伴僧を引きつれて、寝殿へ加持をなさりに行く足音、その大勢の僧たちの足音で、渡り廊下の床板がどんどんと踏み鳴らされるのが、ほかのときの雰囲気とはまったく違う。法住寺の座主は馬場殿へ、浄土寺の僧都は文殿へと、お揃いの法衣姿で、立派な唐風の橋廊をいくつも渡って、木々の間を見え隠れしながら帰ってゆくときも、尊さにその後ろ姿をずっとかなたまで見送らないではいられない気持ちがして、しみじみと感慨深い。）

というふうに、「五壇の御修法」をあげる「伴僧の声々」に宗教的尊厳さを感知したり、「観音院の僧正」の重々しい「足音」や「法住寺の座主」や「浄土寺の僧都」たちの「浄衣姿」にまで、心を惹かれたりする行為になって現れるのです。

ところが、紫式部のこのような彼岸に救済を求める崇高な境地は、また一方では、現実の宮廷生活に疑問が持たれるのと同様に安定せず、常に動揺する心となって現れ

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

るのも事実なのです。さきに引用した「めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の引くかたのみ強くて、ものうく、思はずに、なげかしきことのまさるぞ」と苦しんだあげく、「いかで、いまはなほ物忘れしなむ」、「罪もふかかりなど」と、悲しみながら無常の世の悩みを訴える彼女の心境は、このような事実を物語る以外の何ものでもないわけです。

ちなみに、彼女のこのような心情は当時の女房たちに等しく共通する憂愁なのかもしれませんが、しかし、この憂愁は夫・藤原宣孝を失った彼女の境遇などに基づく個性的な側面がたぶんに作用して、彼女の思考・行動原理の原質を形成しているように、わたしには推察されますので、そこには彼女の精神構造の一端を覗かせているのではないでしょうか。

そのような彼女の精神構造をゆくりなくも見せているのが、次の「出家」に関する総括的な彼女の見解表明でしょう。

いかに、いまは言忌し侍らじ。人、といふもともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひ侍らむ。世の厭はしきことは、すべて露ばかり心もとま

らずなりにて侍れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らず。ただひたみちにそむきても、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それにやすらひ侍るなり。年もはた、よきほどになりもてまかる。いたうこれより老いぼれて、はた目暗うて経よまず、心もいとどたゆさまさり侍らむものを、心深き人まねのやうに侍れど、いまはただ、かかるかたのことをぞ思ひ給ふる。それ罪ふかき人は、またかならずしもかなひ侍らじ。さきの世しらるることのみおほく侍れば、よろづにつけてぞ悲しく侍る。

（現代語訳＝さあ、今はもう言葉を慎むこともしますまい。他人がとやかくいっても、ただ阿弥陀仏に向かって一心にお経を習いましょう。世の中のいとわしいことは、すべてほんの少しばかりも、心もとまらなくなってしまいましたから、出家して仏道修行に精進したとしても、怠けるはずもありません。でも、ただ一途に世を背いて出家の道に入ったとしても、来迎の雲に乗らない間の心が迷って動揺するようなこともきっとあるでしょう。それを思って出家をためらっているのです。年齢もまた、出家をしてもよい年ごろに次第になってきま

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

した。ひどくこれ以上に老いぼれては、また目がかすんでお経も読まず、心もいっそう愚かに鈍くなっていくでしょうから、思慮深い人の真似のようですけれど、今はただこういう出家のほうのことをだけ考えているのです。いったいわたしのような罪深い人間はまた、必ずしも出家の志がかなうとは限らないでしょう。前世の宿業の拙さがおのずと思いしられることばかり多うございますので、何事につけても悲しゅうございます。）

ここにも、出家に対する積極的な考えと消極的な考えとが、対立的に相反発しながら存在しています。「人、といふもともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく経をならひ侍らむ。」といい、「世の厭はしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らず。」という決意は、あたかもあらゆる人生の艱難辛苦をなめつくし、かつそれを熟視熟察した後に、初めて到達した者のごとき崇高な心境を示すものであって、要するに、これはすでに仏道への本意が確立している者の心境を示すにほかならない、と言えるでしょう。

しかし、この阿弥陀仏に浄土を観じて現実の苦悩をそれによって救済されようと志

向する彼女の決意はまた、「ただひたみちにそむきても、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなむ侍るべかなる。それにやすらひ侍るなり。」の告白が示すように、実は、叙情的感傷性の色濃い詠嘆としての側面が多分に揺洩しているのです。すなわち、彼女の出家を妨げる理由としてはいろいろ考えられるでしょうが、このような彼女の意見を支えるのは何よりも、現実生活の満たされない気持ちがただ単に、出家という現実を逃避する行為に変わっただけではたして救済されるであろうか、と疑問視しないではいられない彼女特有の思惟に起因していると考えられるからです。ですから、彼女は「それ罪ふかき人は、またかならずしもかなひ侍らじ。さきの世しらるることのみおほく侍れば、よろづにつけてぞ悲しく侍る。」という心境が語るように、出家の素志を鈍らせるのです。

これを要するに、紫式部の仏道に対する観念は、たとえば菅原孝標女が彼岸を強く憧憬し、それに救済されることをひたすら信じた気持ちとはまったく趣を異にしている、といえるでしょう。したがって、『紫式部日記』から窺知される彼女の精神機構は、出家に関する事象において、一方では仏道精進の心を固める反面、他方ではそれ

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行〔京都光華女子大学〕

を深く凝視せざるを得ないというふうに、対立・反発する二つの精神の同居が象徴するような精神機構と規定できるのです。そのような意味で、わたしは彼女のこのような二重構造的な精神構造を、「たゆたひの心」とも命名しうる、作者・紫式部に備わった独特な精神のありようと、さきに言及したのです。

七．紫式部の「出家」観

以上のように、『紫式部日記』から抽出しうる現実の世界に生きる作者の「出家」観は、観念としては出家の意義を認めるものの、実生活においてそれを信頼し、それにすがって生きようとの気持ちは抱かないという、言わば二律背反的な性格をもつ考え方ですが、実は、この作者の観念・論理はそのまま、『源氏物語』における宇治の大君のそれに連携している、と認められるのです。すなわち、大君の対男性への愛情・結婚の問題、宗教（仏教）に関する問題は、まったくこの作者自身の考えかた、思惟のありかたに共通する以外の何ものでもないのです。

具体的には、大君の薫大将に対する否定的態度は、自己の容貌のひけめ、女盛りを過ぎた年齢、妹中君への思いやり的配慮、薫の理想的すぎる諸条件の完備などの諸要因によって、また、大君の出家に関する考えかたは、幼少時からの「らうらうじく深くおもりか」（橋姫）な性格、荒涼たる宇治の山里の環境、幼少時に母親に死別した運命、父親の俗聖的な生活態度の感化などの諸条件からいって、一応、大君の生活態度・行為は妥当性をもつと考慮されますが、しかし、大君のこのような考えかた・態度には、その根底に薫大将を愛するがゆえの、肉体的な結合たる結婚による愛の幻滅を回避したいと望む気持ちが強く潜在しているのであって、だから「出家」の本意にしても、出家敢行を直前にして、彼女自身が、

「なほ斯かるついでにいかでうせなむ、この君（薫）の斯く添ひゐて残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし。さりとて、かうおろかならず見ゆる心ばへの、見劣りして我も見えむが心やすからず憂かるべきこと、もし命強ひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ。さてこそ長き心をもかたみに見果つべきわざなれ」と思ひしみ給ひて、とあるにてもかかるにても、いかでこの思ふ

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

事してむ、と思すを、さまでさかしきことはえうち出で給はで、……（総角）

（現代語訳＝「ぜひこういう機会に何とかして死んでしまおう。この薫君がこうして私に付き添っていらっしゃって、すべて隔てがなくなってしまったからには、もう他人で通すすべもありはしない。そうかといって、こうも並々ならずご親切のお見受けされるお気持ちが、連れ添ってみればそれほどでもなく、両方で愛想づかしをするというのであったら、さぞかし穏やかならず情けないことであろう。もし無理をして生きながらえるようなことになったら、病気にかこつけて尼姿にでもなってしまおう。そうすることだけがお互いに変わらぬ心を最後まで見届けられる道なのだ」と深く心を決めておいでになって、どうあろうとも、ぜひこの願いを貫きたいと〈大君は〉お思いになるが、そうまで悟ったようなことは口にお出しになれず、……）

と心境を吐露しているように、自己の結婚を回避しようと企図する本心に多く影響されていることを認めざるを得ないのです。このような大君の思考の論理はそのほかにもいくつか指摘できますが、これは要するに、彼女の精神機構に基づく思考の結果で

あって、それは観念と実践とが常に相背反しながら、共存するという論理構造であるといえましょう。

以上を要するに、地上の愛に顔を背けながらその愛執を断ち切れない、また、宗教（仏教）的世界に住みながらそれに徹し切れないという宇治の大君の観念は、『紫式部日記』における作者の人生態度を象徴的に提示していると推断しうるわけで、両者にはほぼ同じ論理思考に基づいた行動・実践のパターンが認められるのではないでしょうか。

八．おわりに

以上、わたしは『源氏物語』の主題（テーマ）が、人物造型の形象化をとおして、人間愛から宗教愛にいたる過程において展開していることを、「出家」という用語（ターム）から追究して、それがほぼ正鵠を射えている指摘であった、と言及しましたが、最後に、具体的に考察対象に取り上げた紫上、宇治の大君、浮舟の人物描写の

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

視点からも、改めてこの問題に言及して、学長講話を締め括りたいと思います。

まず、紫上の描出のされ方は、『源氏物語』における光源氏をはじめとする主要人物のそれと同様に、ひとつの在り方を示しています。それは紫上がはじめて登場する「若紫」巻の可憐な姿から、「薄雲」「槿」巻における内面的にかなり成長した人間へと発展して、さらに「若菜上・下」巻における人間的苦悩をなめ、主体的な人間像へと描出される過程において、紫上自身の人生態度・観念・思惟のあり方もそれに相応して成長発展し、変化していくという人物描出の方法であって、この方法は『源氏物語』における正統的な描出手法といえましょう。したがって、このような正統的な人物描出の方法に基づいてなされた紫上なる人物像は、物語における典型的な人物描出の成功例として高く評価されますが、しかし、そのように優れた人物描出のなされた登場人物像からは逆に、作者自身の独特の精神の反映・心境の吐露なるものは雲散霧散して、作者の統一的な見解などはまず浮上してこない嫌いがあります。

それは浮舟の描出のされ方においても同様のことがいえるようです。具体的には、「蜻蛉」巻の彼女の入水事件を前後にして、浮舟像の人物描写には歴然とした違いが

認められるからです。東国に生育した浮舟は、その性格・人柄は「おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる」（東屋）と描写されるごとく、そこには人生を主体的に生きる人間としての姿はほとんど見られず、それは言わば周囲の動向に左右されて行動するという傀儡的な人間像です。ところが、入水自殺失敗後、蘇生した浮舟はどうかというと、彼女は「蜻蛉」巻以前の姿とは一変した浮舟像と化し、以後は自己の人生を積極的に生きる人間として形象化されているのです。その結果、彼女は『源氏物語』の志向した到達点ともいえる、女性の宿願であった自己の意志による出家・遁世を、見事に遂行しえたわけです。

さきにわたしは紫上の人物造型のなされ方を、『源氏物語』における優れた描出方法による成功例で、それは正統的な描出手法といえる旨の発言をしましたが、浮舟の人物描写のなされ方には、物語世界の構築のために、あまりにも作者の構成原理があからさまに顕現しすぎていて、作者の直接的な統一した精神の反映や見解表明などは希薄化されているようです。しかし、浮舟の人物描写のなされ方もまた、物語世界における主題の追究のうえでは必然的な展開をみせている好例であって、その点、この

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

場合はこの場合で、正統的な描出手法になっているのも事実なのです。

ところが、宇治の大君の描出のなされ方になると、紫上や浮舟のそれとはまったく異質の方法が採用されているのです。たとえば、作者は大君の死にいたるまでの過程では丹念に段階を踏んで描出していますが、しかし、その幾多の事件の展開のなかにも、彼女の精神は常に一貫した独自性を堅持しています。それは現実の作者の観念・感情を、宇治の大君なる人物に、そのまま投影あるいは代替させるという方法であって、その物語の舞台設定には、大君の体質にうまく適合するかのように宇治を選定して、近代小説を想起させるようなはなばなしい事件の展開を見せるのです。具体的には、物語の展開として、作者は宇治の山里で俗聖的な生活をする八宮に、阿闍梨を通じて薫大将を近づけさせ、そこで薫と大君を物語世界の主流へと押し出します。そうして、作者は薫と大君の対面、八宮の一周忌の場面、大君が中君に薫との結婚を勧める場面、匂宮との策略による薫の大君の寝室への侵入の場面、大君の病床に伏す場面、大君の臨終の場面など、読者に寸分の余裕をさえ与えぬ、目まぐるしいばかりの事件の展開をみせます。しかしながら、このような緊迫した状況にありながら、大君の思

惟の在り方・世界観は、「橋姫」巻におけるそれと同様に、まったく進展をみせず、常に同じ信念が停滞しているのです。

このような宇治の大君の人物描写は、『源氏物語』における光源氏や紫上などの主要人物のそれと比較してまったく異質的といわなければなりませんが、それでは、大君の描出に採用された方法は何を意味するのでしょうか。けだし、光源氏や紫上のごとき作者の理想・憧憬の形象化は、作者の幾多の物語創作上の経験の集積によって初めて可能となるでしょうが、しかし、現在の作者の心境ないし見解を物語りに反映するとなりますと、紫上的な描出手法でははなはだ困難となって、大君のごとき描出手法とならざるを得なくなるわけです。わたしは大君なる人物が紫上に託された課題を担って描出されているにもかかわらず、物語の世界から比較的はやく姿を消すのも、ある意味では、こうした作者の精神・考え方を代替する役割を担っているからであって、それだけに彼女は終始一貫して観念的形象性の強い人間像になりえたのではなかろうか、と考えています。

わたしは作者の思惟の在り方が宇治の大君のそれとほぼ類似・共通する側面を、

『真實心』第二十八集平成18年度2007年3月発行（京都光華女子大学）

『紫式部日記』から抽出された作者の精神機構から、すでに証明しましたが、それはいま論述した作者の宇治の大君なる人物造型における描出手法からも実証されたわけです。このことはまた、『源氏物語』における作者の自画像を、明石の上に求めるのがこれまで通説化されていましたが、以上の論述によって、むしろ宇治の大君に求めるほうがより妥当性をもつと言えるのではないでしょうか。

以上、わたしは「紫式部の宗教観―「出家」の視点から―」と題して、平成十八年度の「学長講話」を進めてまいりましたが、みなさん、そのあらましはご理解できたでしょうか。ここで改めてその要旨をまとめることはいたしませんが、平安時代中期の一条天皇の御代に実人生を生きた紫式部は、当代の人びとの大半が思想的背景として等しく共有していた、来世において極楽浄土に生まれかわるために現世（「憂き世」）が存在するのだ、と認識して日夜、仏道修行の精進を怠らなかった生き方を、一方では是認しながらも、他方ではそれを全面的に肯定して生きることはできなかったという、言わば、現実を肯定する感性とそれを見定める理性とを共存させた精神構造の持ち主

で、優れて哲学的な女性であったのではないか、というのが本日の講演の趣旨です。

みなさんも各自、今後自分自身の確固たる人生哲学に基づいて、人生行路を歩んでいかなくてはなりません。その際に、私が今日お話しした内容が、もし多少なりとも参考になるとしましたら、わたしにとってこれ以上の喜びはありません。どうもご清聴ありがとうございました。

――二〇〇六年四月二五日――